

平成23年度調査結果のまとめ

1 総合的にみた結果

(1) 全国平均値との比較からみた結果

総合的な体力の状況からみると、小学校、中学校で男女とも全国平均をやや下回るものの、高等学校（全日制）では、男女とも全国平均を上回っている。

校種別にみると、全国平均を上回る項目の割合は、小学校では約31%、中学校では約41%。高等学校（全日制）では約87%となり、小学校では、前年度から減少した昨年度並みで、中学校では昨年度の67%を大きく下回った。高等学校では昨年度を下回ったもののこれまでと同様全国平均を上回っている。これまで同様、小学校から中学校に進むと全国平均に近づき、さらに高等学校に進むと全国平均を上回る傾向は今年度の結果からも見られる。

項目別にみると、「長座体前屈」が男女ともに多くの学年で全国平均を上回っている。また、女子においては、「上体起こし」「50m走」「ボール投げ」も、多くの学年で全国平均を上回っている。

小学校男女、中学校男子において、全国平均を下回る項目が多い。今年度は、中学校男子にその傾向が強く見られる。

小・中学校の男女とも、「握力」で全国平均を大きく下回っている（ここ数年「握力」に課題が見られる）。

小・中学校の男女とも、「20mシャトルラン」「持久走」で全国平均を下回っている。

(2) 平均値の年次推移（S60～H20）からみた結果

小・中学校男女ともに、ここ数年、多少の高低は見られるものの下げ止まりの傾向が見られる。

男女ともに、依然S60年頃に比べ低い。特に男女の「持久走」、女子の「ボール投げ」でその傾向が強く見られる。

2 校種別にみた結果

<小学校>

(1) 全国平均値との比較

今年度は高学年よりも低学年で全国平均を上回る項目の割合が多い。

女子の「上体起こし」「長座体前屈」は、全国平均を上回っている学年が多い。

男女ともに総合平均は、多くの学年で全国平均を下回っている。

男女の「握力」、男子の「50m走」「立ち幅とび」「ボール投げ」は、全ての学年で全国平均を下回っている。

女子の「20mシャトルラン」「50m走」「立ち幅とび」は、多くの学年で全国平均を下回っている。

(2) 平均値の過去5年間の推移

男女ともに、多くの項目で若干の低下、上昇は見られるもののほぼ横ばい状態となっている。

男女とも低学年を中心に「上体起こし」「20mシャトルラン」で緩やかな上昇傾向が見られる。

男女とも「握力」は低い状態で停滞している。

男女とも「ボール投げ」でここ3年間で低下傾向が見られる。

(3) その他

総合判定の分布割合を見ると、男女とも1年生から5年生において、A判定が10%程度いるのに対してE判定も10%程度いる。

< 中学校 >

(1) 全国平均値との比較

男女ともに総合平均が、どの学年でも全国平均をやや下回っている。

男女の「長座体前屈」「ボール投げ」、女子の「50m走」は、全ての学年で全国平均を上回っている。

男女の「握力」「反復横とび」、男子の「20mシャトルラン」「立ち幅とび」、女子の「持久走」は、全ての学年で全国平均を下回っている。

全国平均を上回る項目の割合が、昨年度から大幅に減少した。

(2) 平均値の過去5年間の推移

男女ともに、多くの項目で若干の低下、上昇は見られるもののほぼ横ばい状態となっている。

中3男女の「上体起こし」で上昇傾向が見られる。

昨年度まで見られた男子の「反復横とび」での上昇傾向が低下に転じた。

(3) その他

総合判定の分布割合を見ると、男子では学年が進むにつれ、AおよびB判定の割合が増え、DおよびE判定の割合が減る傾向が見られる。

< 高等学校 >

(1) 全国平均値との比較

全日制男女ともに総合平均が、全ての学年で全国平均を上回っている。

全日制男女とも、全ての項目、全ての学年で全国平均を上回っているか、ほぼ全国平均並みとなっている。

定時制男子の1・3年生で、ほぼ全ての項目で全国平均を下回っている。

(2) 平均値の過去5年間の推移

男女ともに、全ての項目で若干の低下、上昇は見られるが、ほぼ横ばい状態となっている。

(3) その他

総合判定の分布割合を見ると、男子では学年が進むにつれ、AおよびB判定の割合が増え3年生では70%を越え、DおよびE判定の割合が減り3年生ではE判定が0.5%と非常に少なくなっている。

3 本県児童生徒の体力の特徴と指導の方向（考察）

(1) ここ数年、小学生の段階から、比較的「柔軟性」や「敏捷性」は優れ、素早く巧みに動くことができる児童が多いと言える。小学生は、この時期に特に高めたい「体の柔らかさや巧みな動き」を身に付けていると判断できる。

(2) 全国平均を上回る項目の割合は、小学校、中学校、高等学校と、学年が進むにしたがって増える傾向が定着している。よって、今後、小学校において、教育活動全体を通して、運動遊びなど結果として体力向上につながる取組、楽しみながら運動習慣を身に付ける取組を一層充実させ体力向上を図ることで、中学校、高等学校においても、一層の体力向上を図ることができると考えられる。

- (3) 小・中学校、高校を含め、男女とも多くの学年の「握力」が、全国平均を下回る傾向がここ数年見られることから、今後、小学校低・中学年では運動遊びの中に、筋力アップを図る要素を取り入れ、小学校高学年から中学校では、握力を含めた全身の筋力アップを図るトレーニングを工夫するなど、意図的な取組を行う必要がある。また、測定器具の点検、正しい測定方法の確認を行う必要がある。
- (4) 小学校では男女とも、E判定の児童の割合が、中・高等学校と比べ多く、どの学年においても10%程度見られる。今後、こうした児童に対する継続的な個別指導が必要である。